

---

# DIRTY ROSES

蛇豆

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

DIRTY ROSES

### 【NNコード】

N7445X

### 【作者名】

蛇豆

### 【あらすじ】

「あっちも死んでる、こっちも死んでる、みんな死んでる」

中世ヨーロッパ。

連續殺人に狂う城。嫉妬に歪む女の顔。  
薔薇色の地獄を目の当たりにせよ。

\* 殺人ペースが半端ではありません。どうかご用心してお読みください。

1 (前書き)

テーマソング

Dark Lunacy

「 Lunacycuss」

突然だつた。

女王が崩御した。

今朝、寝室で血を吐いて倒れたという。

それを聞いたミナは涙を流した。

あの優しかつた女王様が亡くなられたのだ。

城の者は皆、悲しみに暮れた。

二十余歳の若き王も例外では無かつた。玉座に爛れる様に座り、腫れた目で虚空を見つめていた。家臣の言葉も、誰の言葉も聞かず、ただ、人形となつていた。

それから一月が経つた。

城は落ち着きを取り戻し、王も毅然とした態度で玉座に座れるようになつた。

女王の遺体は玉座の隣の床下に埋葬した。王は女王を愛していた。女王も王を愛していた。

また一月が経つた。

王は新しい妃を迎えるため動き出した。

王は城内で自分の妃として相応しい娘を探し始めた。

第一の候補に挙がつたのはミナの姉、二ケだつた。

この城で一番の娘。

美貌は美しく温情があり、皆に慕われていた。

だが、その王の指名の一日前、二ケは死んでしまつた。心臓をナイフで一突きされて殺されていた。

葬儀は肃々と行われた。

次に指名されたのは二ヶの親友、ラズナだつた。  
しかし、指名の後日、また何者かに殺された。  
頭を斧で唐竹割りされたらしい。

城の者は皆、これら異常事態に騒然とした。

「指名されたら殺される」

城の娘たちは震え怯えた。

「嬢様！嬢様！！」

耳元でつんざく男の叫び声でミナは跳ねるように目覚めた。と同時に今まで襲っていた暑苦しさが吹っ飛んだ。気付けば息が上がり、頬から汗が垂れて来るのが見えた。

「……大丈夫ですか、お嬢様……相當にうなされてましたが」ミナの老執事、ハインクが独眼鏡を外した。

ああ、そうか。ミナは悟った。

私は悪夢を見ていたんだ……

ハインクから一杯のミルクティーを出された。飲んだ。

「いつもありがとうございます、ハインク」

「感謝の極みで御座います」

悪夢を回想した。

墓で血塗れの姉が手を降つていた……そして、その姉が溶け崩れていいく……

ミナは姉が死んでしまつてから今日の今まで一睡もしていなかつた。目の下に濃いくまが出来ていた。

ミナは部屋の掃除をハイスクルに任せてから食堂へ行つた。すでに料理の載つた皿がロングテーブルに並べられていた。朝日に光る食器達が美しかつたが、恐怖におののく女達ばかりが集つていたためか、とても空気が重苦しい。

頬が瘦けている女。挙動不振で落ち着きなさそうにしている女。幽霊のようにうなだれていの女。たくさんの女達が集まつていた。この城の貴女、侍女の数は併せてざつと六十余。

その内の貴女、二十三人の殆どがこの食堂に集まつっていた。無論、ミナもその中の一人である。

ここでミナは気付いた。

数が足らない。何度も数えて二十一人しかいない。

あの一人は……。

ミナはふと人群の声に耳を傾けてみた。気になる話をしているようだ。

「アンナがいないわ……」

「どうしたのかしらアンナ……」

ざわめきはアンナの話が大半だった。

アンナ……彼女は城一番大人しい貴女である。そして彼女の執事以外殆ど誰とも喋らない、相当に内気な人間でもある。

ざわめきが一層強まるごと、突然、明瞭な女の声が響いた。

——アンナの部屋を見に行つて来ましょ？

声の主はローズ。彼女は貴女の中でのリーダー格であり、とてもプライドが高い女である。それ故以前、指名された二ヶを嫉妬で足蹴にしていた。ミナはローズを忌み嫌っていた。二ヶ、彼女が死んだ時をまあみる所しか思つていなかつたのだろう、と。

ミナはローズが彼女を殺したとも思つっていた。

5分後、ミナを含む貴女全員がローズを先頭にしてアンナの部屋へと向かつて いた。

長い長い回廊を進む。柱の間から差し込んでくる日差しはない。どんよりとした曇天だつた。

どうせアンナが死んでも私には関係ないわ、と先頭のローズが笑つていた。

鉄の兜を持つ騎士達が通りすがつた。これから戦に向かうのだ。隣国と紛争が起こつたらしい。

庭園では噴水の水柱の上で鳥共が円を成して飛んでいた。小鳥のさえずりも聞こえない。

貴女達の足音と噴水の五月蠅しい水音だけが聞こえる。

「さて、着きましたわよ」ローズは言った。華やかな装飾を施された扉が貴女達の前に現れた。アンナの部屋だ。

「アンナ、朝食の時間ですわよ?」ローズを筆頭に貴女達が扉にノックを始める。やはり、皆笑いながら、だ。まるで檻の中で自由を媚びる狂人の様だ。

その狂騒を後ろで震え見るミナとその友人ラミア。地獄を見ているようで気が狂いそうだった。狂つているわ、あの人は皆悪魔よ、とラミアは呟いた。

「扉を開けましょう」とローズが叫んだ。

すると、貴女達は猛獸の如く軀を扉にぶつけ始め、狂騒は一層の激しさを増した。

扉を開ける！！扉を開ける！！

裏返るほどの叫び声。興奮した貴女達の目は赤く血走っていた。

扉を開ける！！扉を開ける！！

その時一気に埃が舞つた。

扉が開いた。

部屋には誰も居なかつた。アンナも。彼女の執事も。ただひとつ、

白いカーテンが生暖かい微風で揺れていた。

部屋は荒れていた。破かれた書物が床に飛び散り、ベッドのシーツが滅茶苦茶に揉まれていた。

ローズはそれらを一瞥すると背を向けた。

「帰りますわよ、つまらない」声の調子は落ち着いていた。落胆で肩が下がつていた。彼女が何を見たかつたのか、ミナとラミアには容易に想像できた。憎悪と恐怖が電流となつて脊椎を流れた。

くちばしに腐肉を掴んだ一羽の鳥が回廊の絵画の上に降り立つた。

食堂に戻った貴女達。

彼女らの顔は青ざめていた。

ローズがいなくなつたのだ。

あの後、皆は散つて帰つていつたのだが、ローズが未だ帰つてきていない。

何時まで経つてもだ。

貴女達の執事達が食堂にやつてきた。

「今日もスケジュールがびつしりですよ、お嬢様。朝食を召し上  
がつて下さい」

貴女達はそれに従い、席についた。

ローズとアンナは何処へ行つてしまつたのだろう……。

その時、ローズの右腕分の女、マリアが言つた。

「皆さん、それぞれの執事に毒味をしてもらいましょう」  
食堂内はざわめいた。

そうだ、食事に毒が盛られているかもしけない、と。

執事達が毒味をした。

パン、サラダ、ソーセージ、と並んでいる料理をそれぞれ少量ずつ専用の小皿に分けて食べた。

「なんら問題ありません、お嬢様」

執事達からそう返答があった。取り越し苦労だつたらしい。貴女達は胸を撫で下ろし、朝食を食べ始めた。

その最中にも密やかな議論。

「ローズはどこへ行つてしまつたのかしらねえ……」

「まさか死んで……」

「アンナを探しに行つたんじや……」

「まあ私にはかんけげば

「何？貴方……うげえ」

「どうしぐぼお」

「げぼげぼがばあぐぼるえ！」

何といふことだろう。

食事をしていた貴女達が突如血を吐き始めた。

「大丈夫ですか！？お嬢様！！」執事達は叫んだ。  
食事が喉に通らず朝食に手をつけていないミナとラミアその他数名の貴女は無事だった。

毒が盛られていた。

食事に手をつけた貴女全員が飛び出さんばかりに眼をひん向き、こみ上げてくる喉を締めた。血の噴水、約二十人分の大吐血が朝食のパンに降り懸かる。呻き声や奇声を上げながら次々と事切れいく。口から泡を吹き出し、喉を自らの爪で搔きむしめた者、発狂して頭をテーブルに何度もぶつける者、様々いたが皆死んでいく。その時、狂騒の中、凛とした声が響きわたった。

——みんな死んでしまえばいいんだわ

凛としていたが怨嗟に満ちた恐ろしい声だった。  
その声がしたと思われる遙か高い天井を見上げる。  
すると、シャンデリアにレイピアを持ったアンナがぶら下がっていた。

次の瞬間、アンナがテーブルの上に降り立ち、狂笑した。醜く美しい笑いだった。

アンナがレイピアを振るつた。切つ先是ラニアに向かつていた。間も無くラニアの額をレイピアが貫いた。断末魔を上げることなく、白目を剥いて一三回体を痙攣させると自ら作つた赤い血溜まりの中に彼女は崩れ落ちた。即死だつた。

悲鳴がこだました。

逃げ惑う貴女達。  
それをかはう執事達。

卷之三

「みんなみんなみいいいいいいいいいいいいいいいいん死んじやえは  
いいんだわああはははははあ！」

眼孔を開き大絶叫したアンナ。 今度は短剣を振りかざした。

ローズの執事モーリシャスのはらわたが斬り裂かれた。よつに沸き立つ臓物の匂いにアンナは嘔吐した。

いいわ――最高よおおおおおおおおお――」

胃液を撒き散らしながらも、臓物を細かに切断していく。

命するだらけ。

次はマリアが餌食となつた。  
喉元をレイピアで一貫された。

「ああああああああああああああああ！」マリアの声は次第に掠れていき、ついに途絶えた。レイピアを引き抜くと、そこから派手な血飛沫が飛んだ。アンナは彼女の光を失った目を見せしめとばかりに一突きした。眼球をくりぬくと、赤くぬめった神経管が眼球にひつひつと一緒に出てきた。それをアンナは食べた。舌である程度転がすと、一思いに噛み砕き、飲み込んだ。アンナの口から鮮血がこぼれ出た。

マリアの執事は絶望してその場にひざまずいた。すると、その脳天を短剣で唐竹割りされた。くぱつ、と小気味良い音が鳴ると、両断された頭部の断面からありつたけの脳髄が溢れだした。プリンのように揺らめきながら出る脳味噌に生き残りの者は絶句した。

ここで何者かがアンナの体を後ろから抱き止めた。

アンナの執事、ドウェルだった。

「止め下さい、お嬢様！！一体何

彼の叫びは彼女に首を締められ途絶えた。彼女とは無論アンナのことだ。

アンナはそのまま五ツ星を引き倒すと、床に落ちていたスマートフォンをくわえさせた。

するとエカルは間もなくして血を吐いて「から血を吐き始めた。海から上げた魚のように身を痙攣させると、やがて動かなくなつた。

そう、毒は食器に盛られていたのだ。

狂い過ぎて呂律も怪しくなつてきているアンナは生き残りに飛びついた。レイピアと短剣を振るい、ミナの目の前で血と臓物の展覧会を開かせていく。あれが心臓、これが小腸、それが脳髄。何でもそろつてるよ。

「お嬢様！！逃げますぞ！！」ようやくハイünkが叫んだのはちようど生き残りが彼とミナだけになつた時だつた。他はみんな殺されてしまつた。死体の中の殆どが虐殺死体だったので食堂は酸鼻極まり無い光景と化していた。

殺されていく光景を見る事しかできなかつた。足が竦んで動かなかつたのだ。だが、残りは自分達だけと悟ると、本能が叫んだ。

「走つて逃げるのですお嬢様！！早く！！」

しかし、ミナは応じない。ミナは余りの恐怖に氣を失つていた。ハイünkにしがみついた姿勢でぐつたりと佇んでいた。

「……！」アンナがこちらに振り向いた瞬間、ハイünkはミナを抱いて逃げ出した。

食堂を出て、走つた走つた走つた。回廊に出て、また走る。後ろを振り返ると、憎悪を叫ぶ怨靈のような顔をしたアンナが猛然とこちらを追いかけてきていた。

息が荒くなつた。肺に呼吸が行き届かない。ハイünkは六十後半の老執事だ。逃げる体力を持つはずがない。だがハイünkは走り続けた。背に抱いたミナを守るために。

ミナの部屋の扉が見えたとき、ハインクの右足を激痛が貫いた。

太股にレイピアが突き刺さつたのだ。転ぶハインク。同時に背に抱いたミナも床を転がつて目が醒めた。辛そうに立ち上がる。

「お嬢様！！貴方様の部屋に閉じ隠つて下さい！！早く！！早く！！」地に伏したままのハインクは絶叫した。それを聞いたミナは自分の部屋へ向かう。

それに反応してアンナがミナに走り向かう。

「にににに逃がさなななななないわわわ！！！」

その足首をハインクが掴んで彼女を引き倒す。

アンナが呻いている間にミナは無事、部屋に入ることができたようだった。

喚くアンナの頬をハインクが乗つかかつて殴る。

「貴方の相手はこの私です」

それからも容赦無く殴る。しかし、アンナに効いた様子はなく、逆に殴られる。

よろめいたハインクが逆にアンナに乗つかられた。

「ああああ貴方みたいな古い耄れ一瞬で肉袋にしてやりますわああああああ！！」

ミナは信じられない異臭の中、震えながらベッドで丸まっていた。血が止まらない傷口の周りを懸命に握る。

部屋の真ん中にローズの死体が捨てられていたのだ。首と胴体は分断され、それぞれ血の海の中で横たわっていた。目玉がぐり貫かれ、顎を舌<sup>ヒ</sup>と斬り裂かれた首。腸がはらわたから引き出され、心臓が暴かれた胴体。酷い異臭を放つ。窓から死体を放り捨てたかたが、無駄だつた。部屋の全ての窓に何重もの木の板が打ち付けられていたのだ。手で剥がそうとしたが、逆に自らの爪が剥がれてしまい、断念した。

凄まじい恐怖感、絶望感。気が狂いそうだった。発狂しそうだった。五感がおかしくなりそうだった。脳味噌が潰れてしまいそうだった。

気が氣でない、半ば氣狂<sup>ヒ</sup>のミナはひたすらベッドで待ち続けていた。

ハインクの帰還と地獄の終止符を。

何時間経つただろうか、いや、十何時間経つただろうか。夜を越え、朝が来た。静寂の中、外で小鳥が淋しくさえずつていた。

一睡もしておらず、意識も混濁しているミナはよろめく足取りでローズの死体を踏み越えて、扉へ向かう。扉の向こうからは何も聞こえない。覗き穴から覗いて先、何先変わった物は見えない。

安堵しながらも、おそるおそる扉を開け、回廊に出る。

クの首が転がっていた。

この直後、ミナは生涯初めて狂い叫んだ。気道が潰れるくらいに叫んだ。

そして、走った。走り逃げた。

王様に助けを求めるためだ。

走った。走った。転んだ。すかさず立つてまた走る。息が切れてきた。だが走る。後ろを振り返つてみる。アンナが追いかけてきているのが見えた。追いつかれぬよう全力で走る。肺が疲労に握られる。痛い、痛い。それでも走る。後人生、走れなくなつてもいい。とにかく走る。走る。限界を悟る。だがまだ走る。頭が痛い。痛い、痛い。走る、走る、走る。肩を掴まれた。払い除けて走る。レイピアが背中を貫いた。走る。短剣が背中を斬り裂いた。走る。走る。ようやく、王室に辿り着いた。扉を開け、アンナが入つてこられぬよつ、閉めた。

「王様！！」ミナは叫んだ。

王様は死んでいた。玉座の上で、レイピアを心臓に突き刺されたまま死んでいた。

ミナ嬢。

声がしたので振り返ると、大勢の鎧騎士が扉を塞いで立っていた。  
なんとその騎士達はこの城の常備軍の者だった。

御免。

直後、ミナの喉元を槍の切つ先が斬り裂いた。

アンナの発狂死した死体が見つかったのはそれからほんの一分後のことだった。

それから一年後、全く新しい王と妃が王室の玉座に座っていた。  
妃となるはずだったアンナは城の裏で乱雑に埋葬された。  
尚、殺された王は生前、国民に粗暴を振り舞いていたらしい。  
殺されたのは当然だ。

だがその時一緒に殺された貴女、使用人が不憫でならない。  
アンナが変革に加担していたのは言うまでもないが、城の者を皆殺しにしたのは彼女の嫉妬や狂気の類だろうか。

こんにちば、蛇豆です。

今回はただ、ただ、何となく書いてみました。

楽しんでいただけなくとも当然です。済みません。

こんなものに時間を割いていただき誠に有り難う御座いました。

さて、次は異世界転生もの書きます。

「F U C K - N B R A T」

題名直訳は「糞餓鬼」です。

ヤクザの若頭が異世界へ転生され、世界各国の殺人鬼（斬り裂きジャック、アルバート・フィッシュ、スウェイニー・トッド etc. . . ）と殺し合い……という吹っ飛んだ物語になる予定です。

お読みいただけると幸いです。

是非とも宜しくお願ひ致しします。

それではまたどこかで。  
さようなら。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7445x/>

---

DIRTY ROSES

2011年11月23日13時47分発行